

道心



禅昌寺通信「道心」第34号

編集 日光山 禅昌寺「道心」編集室

発行 平成21年7月1日

〒732-0002 広島市東区戸坂山根3-2-7

TEL 082-229-0618 FAX 082-229-0822

E-mail: zenshoji@hicat.ne.jp

ホームページ <http://www.zenshoji.org/>

人間存在の原点に 原点立って見よう！

禅昌寺住職 横山 正賢

修証義第三章 授戒入位 第十三節

其帰依三宝とは正に浄信を専らにして、或いは如来現在世にもあれ、或いは如来滅後にもあれ、合掌して低頭して口に唱えていわく、南無帰依仏、南無帰依法、南無帰依僧、仏は是れ大師なるが故に帰依す。法は良薬なるが故に帰依す。僧は勝友なるが故に帰依す。仏弟子となること必ず三帰に依る、何れの戒を受くるも必ず三帰を受けて其後諸戒を受くるなり、然あれば即ち三帰によりて得戒あるなり。

其の帰依三宝とは正に浄信を専らにして、とありますが、帰依について道元禪師は正法眼蔵帰依三宝の巻きに「いはゆる帰依とは、帰は帰投なり、依は依仗なり、このゆえに帰依といふ、帰投の相は、たとへば子の父に帰するがごとし、依仗は、たとへば民の王に依するがごとし、いはゆる救済の言なり」とお示しになっておられます。

「或いは如来現在世にもあれ、或いは如来滅後にもあれと言われるのはお釈迦様のご在世の時であれ滅後の現代であれ、何時の時

代も人間の営みの基本は三宝に帰依する生き方の他に道はないのであるから、朝な夕なに合掌して南無帰依佛、南無帰依法、南無帰依僧と唱えなさいと言われるのであります。これが仏教徒の信仰の始めということなのです。

仏とは森羅万象在るがままの絶対なる姿＝真理をいいます。法とは真理の道理をいいます。僧とは真理の中に活かされる衆生をいいます。たとえ民族が異なり、国が異なり、宗教が異なっても変わらぬ原則としてある真理を言われているのであります。

私達人間は清浄無垢なるものということとは、理想としてはあつても、なかなか現実には「清浄無垢」なる姿、生き方というものには有り得ないことであります。だからこそ三宝帰依の原点を損なわぬよう強調されているのであります。

三宝帰依に対して私達の煩惱の抑止力となる「戒め」が必要となりますから、「其の後、諸戒を受くるなり」と申されるのであります。

ある時、新人社員研修の講義の中で「人間は生きる権利などと言ふけれど、本来生きる権利などは有り得ないのである。無条件に活かされている現実を目覚めて、人間の基本的あり方・生き方に気づかなくてはならない」と講義を続けておりました。すると一人の国立大学を出て市内の企業に就職して研修に来た若者が、私の講義に疑問を抱き聞くに堪えないといった感情を露わにして「質問！先生のお話はおかしい、憲法に基本的人権と幸福を追求する権利が保障されている云々」と激し

い抗議を受けました。

憲法というのは国が組織され、その中で人間が生きてゆく上での拠り所としての約束事に過ぎないのであります。

私は少年の頃、友達に誘われてキリスト教の教会へ一年くらい通ったことがあります。その時に牧師さんの説教の中で「我々は神の愛を授かって人間として地上にお送り賜った。更に神は、馬や牛やこの美しい自然の恵みを人間のために地上にお送り賜った。……」と話されたことが印象に残っていました。

私は後に出家して仏教徒の基本は、此の帰依三宝にあることを学びました。悉くは仏性なり、有りたらゆるもの、そのものが仏のすがたであり、それぞれに尊厳がある、といわれるのであります。

自然は人間のためにあるのではなく、馬も牛も美しい自然、森羅万象がそれぞれの尊厳を以て存在し共に相手を活かし敬う姿が美しいのであると。

これに対して人間は自分勝手な価値観をもち自由奔放に生きようとするものでありますから、人間は宗教を持つことにより、欲望に対する抑止力となる自己をコントロールする戒めを持たなくてはならないのであります。

欲望の抑止力として持つ戒めも、帰依三宝という森羅万象の基本として敬われた後に、自己規制の働きとなる諸戒を授かるということではなければ、意味のないことを示唆されているのであります。

光を伝えた人々
——よき人の歩かれた
あとかたを尋ねて——



大空のように 障りなく

愛知専門尼僧堂 堂長 青山俊董 師

西暦六百年頃のこと、中国、梁の国に武帝という王さまが出られた。深く仏法に帰依し、自ら仏法天子と呼び、仏法護持に勤められた。ある時、インド、香至国の王子で、出家をされて達磨大師と呼ばれる生き仏さまが、海路はるばる中国へ禅を伝えるべくおいでになるというので、武帝は最大の礼を尽くして迎接した。長い長い航海の、しかも命を賭しても仏法を伝えんの誓願の姿に、心からの感謝と讃歎の言葉を捧げた後、武帝は自己紹介を兼ねて、達磨大師にお尋ねした。

「私は今まで沢山の寺を建てたり、お経の翻訳事業を進めたり、多くのお坊さん方の供養をして参りました。どんな功德がありましたでしょうか」と。

相手は一天万乗の天子、普通なら「それは大変な功德でございます」と賞讃の言葉を惜しまないであろうところを、達磨大師は二コリともせず、まことにソツケなく「無功德」と、つまり「何の功德もありやあしないよ」と突き放したのである。

功德のないはずがない。大切なことは、無所得、無条件でやれ、駄賃はしきの仕事、交換条件づきの仕事はするな、そのことを何かを手に入れるための手段に落とさず、そのこと自体を目的としてやれ！「との厳しいおさとしてあろう。

頭をガンとなぐられた思いの武帝、姿勢を正し、あらためてお質ねした。

「仏法の一番ぎりぎりのところ、聖諦第一義というところをお示し下さい」と。達磨大師のお答えはこれまた簡潔である。

「廓然無聖！」の一句、カラツとして何の障りもない大空のように、聖も凡もありやあしない。いうのである。聖人とか凡人とか、善とか悪とか、損をしたとか得をしたとかいつて、われわれは一生涯追ったり逃げたりしているが、そういう「人間の是非善悪のモノサシをかなぐり捨ててみよ、一度死に切ったところから人生を振り返ってみよ、人類の外へ出て人類を、地球の外を出て地球をふり返ってみよ、ほんとうの価値とは何かが、ほんとうの生き方とはどういう生き方であったか、ということがわかるであろう」というのである。

自分のこととなると大騒動で何もわからなくなるが、他人のことは冷静に判断できるように。そのグループの中では大問題であることが、グループの枠をはずしてみると、枠の外から眺め返してみると、大したことではないように、山を出なければ山の全体の姿を見ることができないように、人間の是非善悪のモノサシを一度解体してしまえ、光をあててなおしてみよ、という厳しい揭示がこの達磨大師の「廓然無聖」の一句といえよう。

しかし、幼稚園程度の仏法に対する理解力しか持っていなかった武帝にとって、この大学院級の達磨大師の教えは、皆目見当もつかなかったのではなからうか。「聖人も凡人もないとおっしゃるが、私の前におられる貴僧は聖人ではないですか」と、全く低次元の質問を出した。達磨大師は「不識」、つまり「しらんわい、話にもならんわい」といい捨

て、武帝のとどめるのもさかず宮中を暇乞いし、都を後に揚子江を渡り山深い崇山の少林寺へ入ってしまった。

法を伝えるべき真箇の人材の来るのを待つて坐禅さんまい三昧の生活に入られたのであり、世にいう面壁九年というのがそれである。

正月や選挙や縁日などの縁起物に登場する縁起達磨は、雪深い少林寺の洞窟の中にあって、わずかに被といつて薄い布の中に和紙を入れただけのもので、体を包み、寒さを防ぎながら黙々として坐禅をつづけられる達磨大師の姿を型どったものである。

のぼせをさげてみよう

紀元前三〇年頃のこと。その頃中国は春秋戦国時代。長江中流域を領有していた楚の国に卞和という人がいて、荊山で宝石のみことな原石を見つけ出した。大喜びで時の皇帝である靈王に献じたが、見る眼を持たない王は、偽物を献じたといつてアキレス腱を切るという刑に処した。あきらめきれない卞和は武王に再び献じ、偽物を献上した罪としても一方のアキレス腱を切られた。卞和はなおあきらめめず三たび文王に献上し、ようやくにして取り上げられ、磨いてみたところ稀にみる玉であつたので「和氏の璧」と名づけられた。後に趙王の秘蔵するところとなつたが、秦王が十五城と交換しようと申し出たので「連城の璧」とも呼ばれるなど、波瀾万丈の旅を送る璧となつた。

『從容録』の「示衆」を書いた万松行秀禪師は、その冒頭にこの故事を「卞和三献、未だ刑に遭うことを免かれず」の一句で紹介し、人においても、物においても、人生の生き方においても、本物を見きわめる眼力を持つことがいかに大切かを呼びかける。

「みんなが一番いいものを探そう。値うちないものに、あくせくしない工夫をしよう」と八木重吉が詠じているように、人生は真の価値（宝）を探す旅といつてよからう。何を最高の宝とするか、何を最も価値のあるものとするか、その人の眼の高さがその人の人生を決めるといえよう。

お釈迦さま御在世当時のこと。ビンズル尊者とウダエン王は幼なじみであつた。一方は幾つかの国を支配下におさめて、並びなき大王となつた。一方はすべてを捨てて出家しお釈迦さまの弟子となつて修行し、ビンズル尊者と慕われるようなお坊さまになられた。ある時、ウダエン王の林の中でビンズル尊者が坐禅をしているということを知り聞いたウダエン王は、王としての装いを美々しくし、沢山の家来を引き連れて尊者を訪ねた。ボロのお袈裟をまとい、樹下石上で坐禅を続けておられるビンズル尊者に向かい、王は、「私は今、幾つかの国を支配下におさめ、沢山の財産も家来も、すべてわが意のままだ。どうだ、羨ましくないか」と威張つてみせた。尊者はたった一言「吾に羨心なし」と答えた。つまり「ちつとも羨ましくないよ」というのである。

ビンズル尊者が最高に価値あるものと思つ

ていることと、ウダエン王のそれとの間に、大きなへだたりのあることを感ずる。

万松行秀禪師は、「卞和三献」の故事を出したあと、

「世にいうすばらしい宝などは『用不著』——全く必要ない、欲しくない——、そんなものより『死猫児頭、拈出す看よ』——死んだ猫の頭のほうがよほどましだ——」

という言葉で「示衆」を結んでいる。曹洞宗中興の祖といわれる洞山大師の弟子の曹山に一人の僧が質問してきた。「世の中で最も貴いものは何ですか？」と。曹山答えていわく「死んだ猫の頭が一番貴い」と。「何故、死んだ猫の頭なんぞが最高に貴いんですか？」と重ねて問う僧に対して曹山は「人間の欲の対象にならないから、人間のソロバンの枠外にあるから貴いんだよ」と答えたという。

これを手に入れたら幸せ、あんなになったら幸せと、血眼になつて追いかけて、おもうようになるとのぼせあがり、思うようにならないと落ちこみ、あるいは一つの物の見方、考え方にドップリつかりこみ、そのモノサシを通してすべてのことの是非を判断して疑わず、そのために限りなく人と人との間、あるいは国と国との間の争いが絶えなかつたり……。

そういう人間の是非のモノサシに、価値判断に、一度疑問を投げかけてみようじゃないか、別の光を当ててみようじゃないか、逆上をさげてみようじゃないか、と古人は語りかける。

勝友の庭

他人事に

思っていたことが

現実に

我が身に

降りかかった話



平成二十年九月一日何時ものように、午前四時五十分、目さまし時計に起こされて、毎朝五時過ぎにはやってくる参禅者のために本堂を開け、坐禅堂の鍵を開けようと本堂の回廊を廻っていると、まだ薄暗い闇の中に人影が「方丈さん」と声を掛けるではありませんか、私はびっくり仰天して「エッ！だれ」「青山（仮称）です」闇の中に動く人影をよく見ると三年前までは毎朝坐禅に来ていた青山婦人ではないか、今でも

毎週金曜日の婦人坐禅会に欠かさず参加している八十三才の御仁である。少し興奮した口調で何か言われるが聞き取れず、「まあお座りなさい」と落ち着かせて、聞かされた話が次の通りでした。

「貴女の銀行口座が振込詐欺事件に悪用されている」と言う詐欺に掛かった実話です。

平成二十年八月二十九日金曜日県警の井上と言う者から電話があり「詐欺事件で上野明・田村弘を逮捕したら、北海道の『みずほ銀行の青山花子（仮称）名義の口座』に千六百万円入金してあることが分かったが、あんたもその一味ではないかと言われた。

北海道など行ったこともないと言うと、泥棒に入られたことはないか、貴重品を落としたことはないかと聞かれた、知らないと言うと、それではこの貯金を出してもよいかと言うから、私の知らないものだから、どうぞ勝手にして下さいという、その中には二十六人の人が入金しているので、その人達に返してあげると言いました。

それでは銀行協会の相談係にどうしたらよいか電話を試してみなさいと言われ、教えられた電話番号へ電話をしたら、鈴木と名乗る人物が出て、「それはお困りですね、それでは確かめる為に貴女の指紋がほしいので、貴女のキャッシュカードを取りに係の者が伺いますので渡してください、明日昼頃には私がお返しに行きますのでご心配なく、キャッシュカードを全部作り替えた

方が宜しいから明日伺った時手続きしてあげます。手数料が五千円必要ですが、今月は詐欺の特別取り締まり月間なので無料にしてあげます。

あんたは犯人の一味だと県警に目を付けられているから、出歩かない方が良いでしょうよとか言われて、今思えば変な事だらけなのに県警の人だと信じ切っていたので、全部持つて行かれました。

と一気に話されました。話し終わった頃にはすっかり夜が明けておりました。

毎日の生活も充実した日々を送られ、坐禅会にも二十年近く通われている、日頃は穏和なお顔の中にも気丈な青山婦人の姿とはまるで別人のような、虚脱状態の様に、私は声の掛けようもなく、取り敢えず朝の坐禅の始まる時間が迫っているの、「坐禅でもして落ち着こう」と言う意味も込めて坐禅を勧めたのでした。

詐欺グループの一人からの手紙

平成二十一年五月十八日発信の犯人グループの一人寺本（仮称）こと金貴士の弁護士から青山婦人宛に手紙が届き、弁護士からはこの度の犯罪は友達にそのかされて深く考えないで犯してしまい、本人も深く反省しており、被害金の一部を弁済するので、まだ若い犯人の将来を考えて寛容に願いたいという文面と、犯人からの反省とお詫びの手紙が届いたそうです。犯罪者の一人の寺本（仮称）は詐欺犯罪の実行犯を首

謀者に紹介し詐欺行為を成立させた罪で起訴されたようですが、実際の犯行の経緯は詳しく知らなかったようです。

犯人からの手紙の終わりの部分を少しご紹介しますと。

「私の軽はずみな行動が青山様(仮称)を

被害者より加害者への手紙

深く傷つけたことを、心からお詫びします。本当に済みませんでした。

私自身昨年十月子供を授かり日々考えさせられると共に私も子を持つ父としてこれからは、子供に対して恥ずかしくない生き方をしていきたいと共に、この事を最後に

もう二度と犯罪行為をしない、加担しない事をここに誓います。」

此処でご紹介したいことは、此の犯罪者からの詫び状に対して、返信をされた青山婦人の手紙の内容に仏教徒として気概を称えたいのです。

寺本(仮称)と言う人の手紙を読みましたが事件の事は知らないようなので、私の気持ちも分かって貰いたいので始めから書きます。

面白半分にされたのかも分かりませんが、目にあった者はどれだけ辛い思いをした事かを思っ見て下さい。

子供に恵まれなかった私は主人に先立たれて一人で暮らしていますが、先では養老院にお世話にならなくてはと思い、少しずつ貯めたお金を全部持って行かれて、途方に暮れてしまいました。

夜寝ようと思っても、あの大きな男の人の顔が浮かんで、カードを入れて札束を握ってニヤつとしている姿がちらついて眠れず、食事ものを通らず一気に痩せてしまって、八十四才の今でもミシンを踏んで針仕事をしています、仕事も手につかず三十七キログラム迄になってしまいました。

もう十七年間も禅寺で坐禅をし、写経を続けていますが、私は人様に迷惑を掛けないよう、少しでも正しく生きたいと思って暮らしてきましたのに、こんな目に遭うとは仏様から見たら、まだまだ修行が足らず、私にも悪いことがあったのだろうか、

反省してみても耐えられず、眠れぬまま朝四時真つ暗い坂道を禅寺に向かっていました。

お寺に着いて裏木戸から入って薄暗い渡り廊下に座り込んでいましたら、方丈さんが起きてこられ驚いて「どうしたんか」と聞かれて、今までの事情を話し終わると、「坐禅をして帰れ」と言われ、禅堂に入り禅堂の窓が明るくなるにつれて、何もかも忘れて涙が流れてきて、身体中の悪いものがみんなとれて、あんなに死んでしまいたいと思っていたのに、とても爽やかな気持ちになりました。

湧き出て生きる元気が出てきました。坐禅会の友達も次々に仕事をさせて下さって暮らして行けるようになりました。その代わり今まで続けてきた習い事は全部やめ、旅行・コンサート等出費のいる事は断り、坐禅と写経は続けています。私も坐禅会のご縁がなかったら、あの世に行っていたかもしれません、お子さんのためにも正しい生き方をしてください。

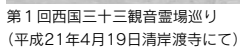
青山花子

寺本貴士様

俳句

佐田大陸バイオリン・伊藤 優。ピア
ノ・黒木健太バイオリン
クラシックからポピュラー迄幅広い

お茶が用意されています。



第二 金曜日のみ坐禅の後、写経・茶話会

10月30日(金)

[illegible]

皆様の随筆、旅行記、体験談、趣味の短歌俳句など何でも結構です。お寄せ下さい。